

翻訳という世界



船越 隆子
翻訳家

翻訳家

「アーユルヴェーダ」という言葉を聞いたことがあ
るだろうか。翻訳の仕事
をする中で、私が出合った
もののひとつだ。

10数年前、ヨロガを始め
てみると非常に心地よく
て、自分にぴったりの健康
法だと思っていたところ、
舞いこんだ仕事だったの
でとても面白かった。

アーユルヴェーダとは、
インドの伝統的医学。サン
スクリット語の「アーユス
(生命)」と「ヴェーダ
(知識)」が合わさった言
葉で、医学だけでなく、生
活の知恵や生命科学、哲学
までも含んでいて、5千年
の歴史がある。

面白かった、と言ったけ
れども、実はけっこうつら
い思いをした。

翻訳したのは「アーユル
ヴェーダの食事療法」(フ
レグランスジャーナル社、
共訳)という本。著者はイ
ンド系アメリカ人女性のマ
ヤ・ティワリさんで、まず
は、その独特の入り組んだ

英語の難解さに驚いた。普
段は英語の「癖」までわか
なかつた私でも、この英語、
どこか違う、と
感じたくらいだ。

気軽に引き受け、分厚い
本だけれど分担してもらっ
たから、ふつうの本1冊分
程度の量と考えれば、2、
3カ月で仕上がるかな、と
いい加減な返事をしてあ
った。

ところが、とんでもな
い。アーユルヴェーダの参
考書をひも解きながら、難
しい英語にためこみして
いるのだから、ますます進
めるはずもない。その上、
別の仕事も並行してやっ
ていたものだから、結局は半
年以上かかった。しかも、
本1冊分どころか、私が担
当しただけでも、優に原稿
(生紙)枚は超える大作だ
った。

そういう意味で、とても
印象に残る仕事だったが、
何よりも、著者の置かれた
境遇にまず衝撃を受けた。
彼女は癌を患い、しかも進
行して、一時は死の宣告を
受けていたそうだった。そんな
重い身の上を告白する序文
は胸に迫る。彼女の言葉を
なげくその思いが伝わる
ようにと翻訳を心がけた。

「癌が身体中を駆け巡
り」、手術で全身麻酔を1
年間に10回もかけて、しま

癖のある英語 容易でない「完璧」

〈6〉



船越さんが翻訳した「アーユルヴェーダの食事療法」

いには麻酔なしでの手術ま
で受け、そして放射線治療
も試みたが治らず、医者た
ちはどうも「薬はこの世
を去れる方法をいろいろ指
導し始めた」ほどだった。
自分の置かれているつら
い状況、そしてこれまでも
自分がどうだったかといっ
過去の自分をもすっかり向
き合ううちに、病気が自分
から生まれたものであり、
原因は自分のうちにあるこ
とに気がついた。「私自身
が『問題』であり、また紛
れもなく『答え』でもあっ
た」と。

それから3カ月間、小さ
な小部屋に一人こもり、一
冊読んでいた医学博士の上
野和夫氏が監修したとい
う。心にも自分との対話を続け
お墨付きがある。
著者がもともとヒンズー
教を信仰する家に育ったこ
ろ、希望や絶望などあ
らゆるものを吐露したのだ
い。背景もあるだろうが、
食事や生活に自然な方法を
取り入れ、そこから東洋医
学、そしてアーユルヴェ
ーダへと導かれていく。
この本には非常にた
んぱな食材とレシピが紹介
されている。日本にない
豆や野菜もあって少
々などにこだわったが、
実に多岐にわたって
著者が食べることをこれ
ほど大事に考えているが分
かる。結局、自分の身体を
作っているのは、自分が口
から食べたものなのだ。

こうした専門的な内容の
書物の場合、訳している
ときには、その全体像がな
なかつたかめなことがあ
る。個性的な英文で、一文
ずつの意味解釈にかかり
りになっているせいもある
だろうが、訳し終えて初
めて、ああ、こういうこと
だったのか、と気づかされ
る。

出版されて本になっ
たら読んでいてさえ、ま
だ新たな発見をすることも
ある。もつとふざかしい訳
し方があったかも、など
反省させられることも度々
だ。
何事もそうなのかもしれ
ないが、「完璧」まで、そ
う簡単にはたどりつか
ない。(徳島市在住)

癌克服 答えは内面に